

第 11 回 BOOKSHORT AWARD

ファミリア・ストレンジャー

さくらぎこう

本文 4887 字

あらすじ

人との関りあいを極力避けて来た。他人と一緒に暮らすなど考えられず結婚もしないで今日まで来た。母が遺したマンションに越してきて 30 代最後の誕生日の日、いつもエレベーターで乗合せる人と初めて挨拶を交わす。たったそれだけなのに、母が何故ここを選んだのか理解できた気がした。

このマンションに住み始めて 6 年になる。中古の 2DK だ。マンションとは名ばかりの集合アパートのような建物だが独身の一人暮らしには十分だった。ローンも家賃もない。管理費と 1 年に一度通達が来る固定資産税だけなのだから楽といえば楽だ。

あのとき意地を張らずに良かったと思っている。

このマンションを母が遺してくれたことを知ったとき、素直に受け入れられなかった。実の母とはいえ 3 才の時に別れてから一度も会ったことはないのだから。母の記憶も思い出

もないのだ。

「もともと別れる時に俺が持たした金で買ったマンションなんだから、お前が遠慮することはない」

父の言葉に反射的に「いない」と言い返していた。

「そうはいかん」と父は言う。

「涼真にやったら？」

「あいつと涼真とは血がつながってない」

実母は会ったこともない人で、姿かたちを想像することもできないが、父からしたら「あいつ」なのかと、ざわざわしたものを感じた。父と母は離婚してしまえば全くの他人になるのだと痛感した瞬間だった。

母と、父の再婚相手との間に生まれた涼真は当然なことに血のつながりはないのだから、母の遺したマンションを引き継ぐのは自分しかいなかった。当時、75,000 円の 1DK に住んでいて、再契約の手続きが迫っているときだった。

薄っすらと埃をかぶった母の荷物が残っていた。それを処分してからの引っ越しとなった。マンションの室内も地味で家財道具も贅沢なものはひとつもなかった。寝室にはベットとプラスチックの衣装ダンスがあり、もう一部屋は居間兼食堂として使っていたのか、炬燵と壁際にカラーボックスが 3 個並び、ポットや炊飯器などが整然と並んでいた。どれも安価なものだ。

母の生前の生活を知りたいと思わなかった。

業者に一括処分を頼んだ。

2DK で広いとはいえないがベランダは南向きで開放的だ。東側にも窓が付いていたが、そこにはお気に入りの家具を置こうと思った。持ち物の中で最も高価なもので、樺材で作られた和ダンスだ。17 歳で東京へ出てくる時は好みに合わず、持たせようとする祖父と喧嘩になった。

断ったつもりがアパートに届いていた。けっきょく衣類を入れるダンスを他に持っていなかったのをそれを使わざるをえず、そのまま使い続けている。

最近、それを美しいと思えるようになった。年を重ねて物の価値が分かってきたということだろうか。今では持ち物の中で唯一誇れるものになっている。

このマンションは陰で老人マンションと言われていたが、滅多に住人と出会うことはなかった。朝の通勤時と夕方の帰宅時にエレベーター内で乗り合わせることはあったが、皆一様に不愛想で言葉を交わすことはなかった。

それがかえて良かった。人つき合いは不要だ。誰かと友達になろうとか、隣近所の住人と仲良くなろうとは考えなかった。

人はそれぞれ別々の人格で生まれ、別々の環境のもと育つ。思考回路も環境も違う人間同

士が真にわかりあえることなどない。わかりあおうとすることがそもそも間違っているのだ。そんなことはドラマの中だけのことだ。

だから、結婚もしていない。他人と一緒に暮らすなど考えられなかったからだ。寂しくはないし、なんの後悔もないと確信していた。39 回目の誕生日までは。

3 歳の時、母は恋人をつくり家族を捨てて家を出て行ったと聞かされていた。父はその後再婚したが、僕が新しい母親に懐かなかったようで父方の祖父母に育てられた。

記憶にはない。母の事も、父と同居しなかったわけも、全て祖母から聞いたことだ。高校 3 年の時祖母が亡くなり、大学受験を理由に上京した。合格できる大学を選んで受験し、そのまま東京人となった。父も引け目があるのか卒業するまでの仕送りは続けてくれた。

大学最後の 1 年間、弟の涼真が大学 1 年になったため、父は 1 年間、僕と涼真の 2 人分の仕送りをしなければならなかった。

「まだまだ、金がかかって大変だ」

仕送りがこれからも続くことを父はぼやいたが、その顔は嬉しそうだった。二流大学だった僕とは違い弟は優秀だ。私立の一流校に推薦入学が決まり上京している。

地味なマンションとはいえ持ち家となったのだから自分好みに改装したいとも思ったが、資金もないことから部屋の中の家具など一括処分したあと絨毯だけを取り換えて引っ越し荷物を運びこむことにした。

がらんと広くなった部屋に入ると、菓子箱のような箱がぽつんと置いてある。開けてみると母の生前の手紙やら古い写真が何枚か入っている。業者が捨てられず気を利かしたのでろう。

箱の中に僕の写真はなかった。

母と思われる女と男が写っている写真があった。母が家を出た直後の写真と思われた。女の方は僕に似ていて 2 人とも 30 歳前後に見える。

不思議な感覚だった。今の僕より若い母がそこにいた。若くして子を生子、子が 3 歳のときに家を出て 58 歳でこの部屋で亡くなった。自分はその歴史をまったく知らないのだ。

母と一緒に写っている男は誠実で優しく見えたが、家財道具処分前の部屋には生活感がなかった。男と暮らした痕跡が感じられず、きちんと整理され、綺麗好きな 1 人暮らしの老人の部屋のようなだった。

母は幸せだったのだろうか。今となっては訊きようがなかった。

箱の中身をまとめてゴミ箱に入れようとして、思い留まる。

木枯らしが居間のサッシ窓を揺らすのか、がたがたと音を立てた。

都内のサプリメント会社で経理事務をしているため退社は規則正しい。ごくたまに残業をすることもあったが、殆どは 6 時に退社できた。最寄り駅前のスーパーで買い物をして

帰って来るため家に着くのは 7 時半から 8 時頃だ。外食は殆どしない。外で食べると人の眼が気になり落ち着かないのだ。

ほぼ自炊なので料理の腕もちょっとしたものになっている。社内の女子より上手く作れると自負している。

社では人つき合いが悪い変人を通っているが、それを歓迎している。飲み会などに誘われずにすむからだ。

帰宅時のマンションのエレベーターでよく乗り合わせる人がいる。老人マンションには似つかわしくない若者だ。いや世間では中年の部類にはいるのだろう。39 才の自分と同じ位なのだから世の中的にはじゅうぶんにオジサンだ。いつも極力目を合わせないようにしている。

顔は覚えたが、何階の何号室に住んでいるかは知らないのだ。彼はいつも大きなバックを持っていた。中には何かパンパンに入っているようだが重そうではなく、ひょいとそれを担いでエレベーターに乗り込みさらに上の階へと上って行く。押されたエレベーターのボタンで推測すると、5 階のようだ。

寒さが徐々に和らぎ、温かな春の日差しを心待ちにし始める 3 月になると、ひとつ年を重ねることを意識する。最近は特にそうだ。結婚は自分の意思でしなかったのだが、これから先のことを想うと理由もなく不安になることがある。

祖母の葬式が済むとすぐに上京し、その後は故郷へは祖父の葬儀に帰ったきりだ。暮れも正月も帰らない。故郷には良い想いではなく、帰りたい場所でもなかった。

義母には特に冷遇されるわけではないが涼真と先妻の息子の自分とはあきらかに違う存在だった。子どもの頃から家族として一緒に過ごさなかったのだから、心の交流もなく、家族としての実感もなかった。当然と言えば当然だ。

父はときどき電話をくれたが、いつも素っ気ないやりとりで終わった。

「どうだ、元気か？」

「うん、変わりなくやってる」

「そうか」

それだけ確認すると、もう話すことがなくなった。今では弟の涼真も東京の大学を卒業し、そのままこちらで就職している。結婚もしたが結婚式は挙げなかったのだと父から聞いた。年賀状は届くが、結婚相手に会ったこともなかった。

父も寂しいのかも知れない。祖父母に任せっきりにしてしまった息子と、そばに置き愛情をかけて育てたつもり息子が、共に故郷を離れ東京人になってしまった。2 人とも故郷へは戻らないと感じているのだろう。

父も年をとった。

このマンションに住むようになってから、ずっと気になっていることがある。

父は母と別れる時にまとまった金を渡したと言った。母はその金でこの中古マンションを買い頭金にしたのだと。だとすると母が家を出て行った後の消息を父はある程度知っているということになる。連絡を取り合っていたのだろうか？

2つ目の疑問は、母が父から貰った金をこのマンションの購入資金にしたのなら、父は慰謝料とも思えるほどの大金を母に渡したことになる。恋人を作って出て行く妻にあの父がそんなことをするだろうか？

そして、母はどうしてこのマンションに決めたのだろう。駅から近いわけでもなく、商業施設が近くにあるわけでもない。住むには不便な場所だ。

答えにたどり着くことのない「どうして」という疑問は、何年も答えを得られないまま繰り返されてきた。

僕は何も知らないのだ。

何も知らないのは知ろうとしなかったからだ、痛感する。祖母からは母は恋人ができて出て行ったという以外は何も聞かされていない。僕も聞こうとしなかった。そのまま成長し6年前に突然、このマンションを遺して亡くなったと聞いた。

今、このマンションに住み想う。おそらく自分も母と同じようにここでひとりのまま死んでいくのだろう、と。

初めて自分から父に電話をした。

「あのさ、母親の墓ってどこか知ってる？」

「実家の墓地に眠ってる」

母方の祖父母の墓と一緒に入っていることを知った。母は故郷へ戻っていたのだ。

「名前なんだけど、何ていうの？」

「なんだおまえ、母親の名前も知らないのか？」

「僕は、ばあちゃんから何も聞かされてない」

父は、暫くのあいだ沈黙した。電話で言うことじゃないんだがと前置きして話し始めた。

「俺が悪かったんだ。お前にちゃんと話しとかなきゃと思ってたんだが」

そこで父は再び言葉を切った。

「もしかして、母が男をつくって出て行ったというのは、嘘？」

「いや、嘘というか、そう言っておけばお前が母親を恋しがることはないだろうと、ばあちゃんが考えたんだよ」

「なんだよ、それ！」

「おまえは見事にハマって、母親の話を聞くのを嫌がった」

「じゃあ、どうして家を出たんだよ！」

怒りが込み上げてきた。

「好きな男ができたといつが言ったのは本当だ。だが離婚はそれが理由じゃない」

それから父は言葉を詰まらせながら話し始めた。母は育児ノイローゼー気味だった時、父の浮気相手が男児を出産したことを知りうつ病を発症した。子の世話ができなくなり自分から妻の座と母親の座を捨てたいと言ったのだという。家を出て行くにあたり義務を果たさないのだから母としての権利も放棄すると約束し、以後それを守ったようだ。

僕が3歳の時に家を出て、涼真とは3歳違いという事実が、この時ほど刺さったことはない。

育児のわずらわしさから解放されて、恋しい人と幸せになれたのだろうか。

39才の誕生日の日、いつものように勤務し、いつものようにスーパーで買い物をして帰って来た。マンションのエレベーターに乗ると、大きなバックを抱えたあの人が乗り込んで来た。そのとき、なぜか目が合った。その人が軽く頭を下げ「こんばんは」と言った。「こんばんわ」と返すと「咲きましたね！」と言った。笑顔だった。

「え？」と僕。

「ハクモクレンの花です。東側の101号室の横にある」

花に興味がなかった。ハクモクレンというのがどんな花なのかも知らない。ただその人があまりにも幸せそうに言ったので、見てみたいと思った。101号室の横なら201号室の僕の部屋の窓を開ければ見ることができるはずだ。

和ダンスを置き殆ど開けたことがない東側の窓を開けると、窓の外に拳大の白い仏花のような花が咲き誇っていた。媚びることのない気品と圧倒的な説得力を持った見事な花だった。

母はこの花に魅せられてここを選んだのかもしれない。ふとそんな気がした。

ハクモクレンの花が母の生きてきた痕跡と共にあり、たとえ短い間でも好きな人と幸せな時があったのなら、僕は救われる。

「ひとりで泣かないで」と言ってやれるのに。

今日は39回目の誕生日なのだから。

「お母さん、産んでくれてありがとう」了